

ここに、扉があります。濃い霧で覆われたような、不思議な白色の扉です。扉を開けた向こうには・・・白くて小さな物語。

< 雪 原 >

透子は歩いていた。前へ前へと急ぐ足は重く、進んでいるのか足踏みをしているのかわからない。雪だ。たえまなくしんと降り続ける雪が、透子の一步を悲しくらいにくだいてしまう。踏みしめた足下が頼りなくきしむ。それでも、透子は歩く。今は止まってしまうことの方が怖い。理由ははっきりわからないけれど、透子の中の誰かが、耳元でずっとささやいている。「アルイテ・・・トマラナイデ。」

< ビッグフット >

どれくらい歩いたのだろう。一面の白い世界の中に、ほんやりとオレンジ色に光るものが見えてきた。ぐんぐん近づいてくる。おぼろげな影がやがてはっきりと形をなし、透子は絵本でしか見たことのない、かまくらを初めて目にした。雪の上におわんをふせたような、半円形の小さな空間が口を開けている。透子は中をそうと、のぞき込んだ。突然、お腹の底が揺さぶられるような雷の音が降ってきた。振り返ると、雪の中に毛むくじゃらの大男が立っている。手も足も身体全部、透子の3倍はありそうだ。大男にどんと背中を押されて、透子は転がるように中に入った。外の刺すような空気とは違う、ふんわりとした暖かさが透子を包む。がちがちに凍り付いていた服が、溶けて蒸気をあげていた。

また雷だ、と首をすくめたら、それは大男の笑い声だった。目と鼻と口のわずかな部分をのぞいて、ほとんど全身毛むくじゃらの男が何がおかしいのが、わっはっは、と大笑いしている。茶色い目尻に涙さえ浮かべて。その顔を見ているうちに、なんだか透子もくすぐったくなってきた。思わず、くすっと笑ってしまう。すると大男はびっくりしたように笑いをやめ、透子の顔をまじまじと見つめた。透子もこわごわ、大男の小さな目に映る小さな自分の顔をのぞき込む。息をつめて見つめ合うそのうちに、またどちらともなく笑い出した。わっはっは、の合唱が、大男と透子のかまくらに響く。

< 氷 塊 >

ひとしきり笑ったあと、大男は、どこからか大きな丸いパンを取り出して、透子に差し出した。透子の顔ほどもある。一口食べると、ほんのりした甘さが広がる、極上のパンだった。透子の前にいつのまにかマグカップが置かれ、湯気をあげるミルクがとろりとつがれていた。口に含むと、はちみつの味がする。おいしそうに食事をする透子を、大男は優しい目でじっと見つめていた。が、ふと眉をひそめ、大男は透子の頭に触れた。髪の間から、鋭くとがった氷の塊が現れた。

「いたかっただろう。」

くぐもってぎこちないけれど、大男の言葉は、透子の心にまっすぐ届いた。その氷ならよく知っている。透子の目に涙が浮かんだ。――大人にならなきゃいけないんだ。新しいお母さんができるんだもの――けれど、お父さんがあの人に向ける笑顔を見るたび、呼ぶ声を聞くと、氷は少しずつ大きくなった。透子の意志に反して、毎日毎日鋭く大きくなって、やがてそれは透子の頭をキリリと刺すようになった。

< 灯 火 >

気がつくと、^{おえつ} 嗚咽する透子を、毛むくじゃらの大きな手が包んでいた。透子の頭はすっぱり大男の胸の中におさまって、どんな痛みからも守ってくれるようだった。「見てごらん。」大男の手に、さっきのものよりずいぶん大きな氷の塊が現れた。それは、雪雲のようにどんよりとしていた。ぎざぎざとあちこちが尖っていて、持っているだけでも痛そうだ。

その時、ふと懐かしいにおいがした。氷の中からだった。よく見ると、黒い喪服姿の男の人が、モノクロの母の写真と一緒に、うつろに映っていた。闇に沈んだ部屋の中で、煙草の光だけが、ぼっかりと浮かんでいる。その人の背中が小刻みに震えているのが、透子にははっきりと見えた。

「何をすべきか、わかるか？」大男は透子の顔をじっと見つめた。

透子は、こくと頷くと、そっと氷に触れてみた。びくと氷塊が揺れた。

< 春 立 つ >

煙草のにおい。誰かが呼んでいる。早く行かなきゃ。私を呼んでる……。透子が^{まぶた} 瞼を開けると、すぐ目の前に、お父さんの顔があった。久しぶりに見るその顔は、くしゃくしゃに涙で濡れていた。

「気がついたか？透子、わかるか？」お父さんの黒い瞳の中に、ベッドで眠る自分の姿を見つけた。「お父さん。」そっと、呼んでみた。太い両腕が透子をぎゅっと、抱きしめた。

「もう、大丈夫ですよ。」傍にいたお医者さんが、にっこり笑った。

「夢をみたよ。」「そうか。」ようやく透子を離して、お父さんは笑顔になった。

「あったかい夢だったよ。」「・・・母さんに会えたか？」

優しい声だった。まるで、かまぐらの大男みたいに。

「ううん。ビッグフットに会った。」「それ、ヒマラヤの雪男だろ。」「かまぐらに住んでたよ。」

白い病室に、明るい笑い声が響いていた。透子は笑いながら、お父さんの氷塊が少しずつだけれど、確かに溶けていくのが、見えた気がした。

うっすらと春の空気が立ち上る、いつかの2月のこと。